

流氷の着岸が少なくなった沿岸部における コンブ場の保全

霧多布東地区藻場保全活動組織

地域の特徴

北海道東部に位置する浜中町（人口約 5,800 人）は、太平洋に面する町である。北部の内陸では酪農が盛んであり、生産される生乳は高品質で有名である。また、沿岸部では漁業が盛んであり、特にナガコンブは日本有数の生産量を誇る。

町名の由来は、アイヌ語の「オタノシケ」（砂浜の真ん中）を意識したものであり、この砂浜は榊町から暮帰別にかけての海岸を表している。

6 月～10 月に行われるコンブの天日干し風景は、霧多布地区の風物詩となっている。



コンブの天日干し風景

霧多布東地区藻場保全活動組織について

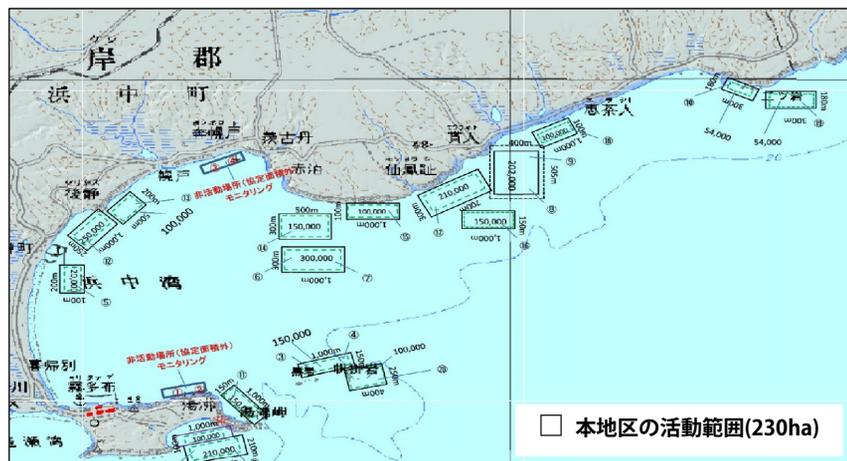
設立：平成 25 年度

体制：現在の会員数 85 名

目的：保全活動を通じて、藻場資源（コンブ類）の維持を図ること

当地区では、近年、流氷の着岸が減っている。流氷の着岸は、コンブ場の維持保全に大きく寄与する。流氷は、着岸する際に、海底の岩をこすり、その表面についた雑海藻（コンブ以外の海藻）を取り除く。雑海藻が取り除かれた岩はコンブの好適な着生基盤となり、良好なコンブ場が再び沿岸部に形成される。

こうした当地区のコンブ場の特性が、近年、失われている。そこで、本活動組織では、流氷に代わって、SK フープ（回転式雑海藻除去機）や洗耕機（曳航式雑海藻除去具）を用いて人の手で岩盤清掃を行い、コンブ場の保全を図ることにした。



活動組織によるコンブ場の保全活動



SK フープ



SK フープによる岩盤清掃作業



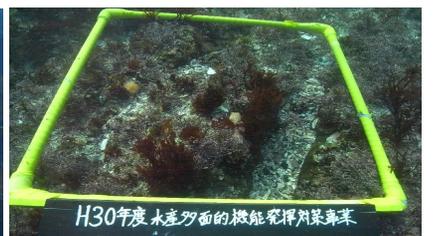
洗耕機



洗耕機による岩盤清掃作業

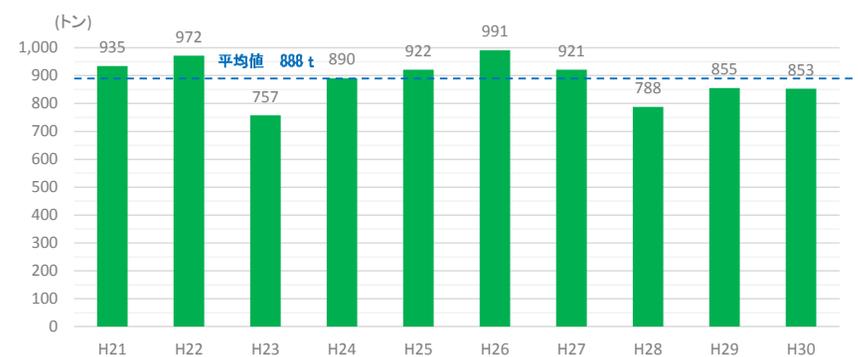
コンブ場の保全効果について

モニタリング調査結果(以下の写真)より、コンブ場の保全効果についてみると、岩盤清掃を実施した調査区では、ナガコンブの着生が良好であった。一方、岩盤清掃を実施していない対照区では、雑海藻の着生がみられるだけで、ナガコンブの着生はみられなかった。このことから、流氷の着岸が少なくなった沿岸部のコンブ場を保全するにあたって、本活動組織の取り組みが有効であることが判った。



モニタリング調査（左：調査区清掃有、右：対照区清掃無）

H21 年以降の本地区が所属する浜中漁協のコンブ漁獲量の推移を下图に示す。直近 10 年間のコンブの平均漁獲量は、888 トンと高水準であり、豊漁年は 900 トン台を超えた。本活動組織は、霧多布東部地区の沿岸 230ha の範囲を有しているが、岩盤清掃を毎年継続して実施することで、本地区の主要水産物であるコンブ類の資源を一定量維持することができた。今後も、流氷の着岸が少ない状況が続くと予想されることから、引き続き岩盤清掃の活動を継続させ、コンブ場の保全を図っていききたい。



浜中漁協のコンブ漁獲量の推移